

今月の子ども

上野公園の子どもたち

中園孝信（撮影・文）



上野恩賜公園の中の子ども遊園地です。周辺には、動物園・美術館・博物館などがあります。リュックやバッグを持っている親子の様子から、電車・バスなどに乗って来ているようです。

初めて顔を合わす者同士が遊んでいます。泣いている子どもや喧嘩をしている子どもはいません。年長のお姉さんが気配りをしているようです。子どもたちは、何を学んでいるのでしょうか。

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

「青は藍より出でて藍より青し」という言葉がある。フラジャイルの（弱弱しい）存在に見えながら、子どもの力や発想は親のそれをやすやすと超えていく。

かつて6歳の息子に山歩きを教えたことがある。翌年も同じように疲れない歩き方を丁寧に教えた。だが、彼が10歳を超える頃には、すでに立場は逆さまになった。彼が軽やかに先行し、私は時々待ってもらおうという、情けない様相を呈した。こんなに早く逆転されるとは思いもよらなかった。悲哀とともに一抹の喜びがあった。

親は子どもを育てるが、それは自分を必要としないように育てるのだ。息子は父親を超え、娘は母親を超えてひとりで生きていく。

育児とはそういうパラドックスを生きることである。

[谷川俊太郎](#)

1931年東京生まれの詩人、翻訳家、絵本作家。

あわてなさんな

谷川俊太郎

花をあげようと父親が云う
種がほしいんだと息子は云う

翼をあげるわと母親が云う
空が要るんだと息子が云う

道を覚えろと父親が云う
地図は要らないと息子がいなす

夢を見ないでと母親が云う
目を覚ませよと息子がかみつく

不幸にしないでと母親は泣く
どうする気だと父親は叫ぶ

あわてなさんなと息子は笑う
父親の若い頃そっくりの笑顔で

（詩集「魂のいちばんおいしいところ」より）

「東京にも空がある」

NPO 法人くにたち農園の会 理事 小林未央

高村光太郎の『智恵子抄』では、知恵子が「東京には空がない」と言いますが、私は“ここ”で、広い空の下、無邪気に走り回る子どもたちを見ながらいつも、「東京にも空がある」と思っています。

“ここ”「くにたちはたけんぼ」は、国立市谷保の“ハケ（ママ）”と呼ばれる雑木林に覆われた立川崖線の下、東京でも稀少な田んぼや畑の残る里山風景の中にある農園です。初めて訪れる方は必ずこうおっしゃいます。

「東京にもまだ、こんなところがあるんですね。」と。

私たち「NPO 法人くにたち農園の会」は、現在2つの拠点で、地域の子育て支援活動を行なっています。1つは、前述の農園「くにたちはたけんぼ」。もう1つは、農園から歩いて5分にある古民家「田畑とつながる古民家 つちのこや」です。

実は、私たちの活動は、当初“子育て支援”を意識して始めたものではありませんでした。“子育て支援”が活動のテーマであると私たちが明確に意識したのは、この「つちのこや」での活動が始まってからです。

活動のきっかけは2011年、国立市「農業・農地を活かしたまちづくり」事業協議会にて、“農地が持つ文化的、教育的価値や公共性を、広く市民に理解してもらうために実践の場”の必要性を感じたことでした。

この時から、新しい農園モデル確立への模索を始め、2012年に任意団体「くにたち市民協働型農園の会」を設立。翌年、国立市と地主さんと三者で協定を結び、閉園した梨園跡地を借り、その“実践の場”として、「くにたちはたけんぼ」を開園しました。

2013年からは、農水省の「農のある暮らしづくり交付金」を得て、「畑を居場所に」をテーマに、親子向けの「田んぼ体験」や、未就園児の親子と妊婦さん向けの「森のようちえん」、小学生向けの「放課後の子どもたちの居場所（学童クラブ）」、リトルホースとのふれあい「くにたち馬飼舎」等、様々なイベントを実施してきました。

こうしたあゆみの中で、私たち自身が見えてきたことがいくつかありました。それは、種まきから収穫、そして食卓に続く「農」的環境は、自然の循環の中で私たちが「生きる」原点であること。子どもたちが、農的体験を通じて、自然の恩恵を感じることで、育てること、失敗すること、自分で考えること、工夫すること、仲間と力を合わせることなどの体験が、かけがいのない学びにつながっていることです。

これは、私たちの主要メンバーが子育て当事者で、自分や仲間の子育てに必要な場を求めて、共に楽しく助け合ってきた中で気づきが、結果、地域での“子育て支援”の場づくりにつながったとも言えます。

例えば、私たちは子育て中に様々な場面で、大人の都合で子どもたちに制約を押し付けています。「遊んじゃダメ」「走っちゃダメ」「触っちゃダメ」「騒いじゃダメ」「汚しちゃダメ」「危ないからダメ」「迷惑かけちゃダメ」と。そして、子どもたちだけでなく、「ダメ」を連発してしまう私たち大人も、疲弊しきっています。

ですが、子育ての環境が田畑に変わるだけで、ありとあらゆる「ダメ」が「OK」に変わります。裸足になる、遊ぶ、走る、触る、穫る、獲る、壊す、汚す、作る、火を起こす…。用水にドボン、田んぼで泥だらけ、汚れた洗濯物は勳章です。私たちも子どもたちに「こんなになるまでよく遊んだね」と、たくさん誉めてあげることができます。こんなに大人も子どもも心が開放される経験は、他では味わえないことでしょう。



もちろん、このような体験は、危険や安全を熟知したスタッフの指導と見守りがあることが前提ですが、私たちは「サービス(職務としての役務提供)」の立場ではなく、「サポート(支援者)」として、保護者や子どもに寄り添う形を理想としています。

なぜなら、一方的にサービスを提供する、受けるのではなく、双方向で当事者として一緒に考え、それぞれができることを持ち寄り、地域ぐるみで子どもたちを見守り育てる環境こそが、よりよい子どもたちの未来を育むのではないかと考えているからです。

古民家「つちのこや」での活動は、始まってからまだ1年ですが、ここはもともと空き家だった築60年のお屋敷を、建築家、大工、デザイナーなど様々な職能を持った方々とシェアしお借りしているコミュニティスペース“やぼるじ”の中にあります。私たちは、このような地域の資源を活かし、多種多様な方々の力をお借りして、試行錯誤しながら、地域ぐるみでの共同参画型の子育て支援の新しい形を作ろうとしています。

“子育て支援”というテーマについては、まだ蒔いたばかりの種のような私たちですが、みなさまには、ご支援とご協力、そしてご指導のお力添えを頂きたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(了)

※編集委員会より

みなさま：子ども支援実践の記録をご投稿（お申込み）下さい。締め切りはありませんので、順次掲載させていただきます。

I 私の子ども研究から

鈴木 聡（東京学芸大学 准教授）

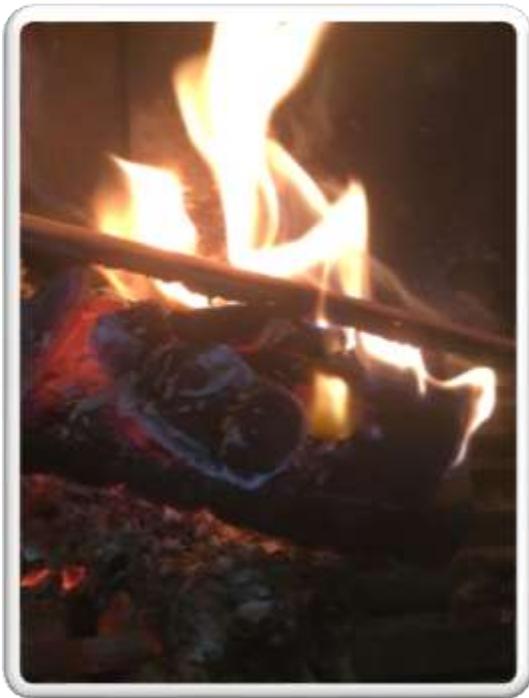
小学校の教師を20年間していた私にとっての「子ども研究」は、子どもたちとともに創ってきた「授業実践や生活そのもの」に他なりません。研究者になった今、綴ってきた実践記録を読み返すと、自分の実践史にはいくつかの節目や変容があったように思います。教師に成り立ての頃は、とにかくがむしゃらで、子どもたちとよく遊んだ記憶があります。授業実践に焦点を当てると、できるようにさせることやわかるようにさせることに邁進していました。情熱をもっていたといえれば少しは格好が付くのかもかもしれませんが、私が目標を立てて子どもたちに付いてこさせるようなタイプであったと思います。しかし、学びとは本来、子どもたちの主体的な活動であるべきです。切実性をいかにもたせるか、子どもたちの学びの原動力は何なのかが、そして「できる、できない」という結果より、そこで子どもたちがどんな学びをしていたかという過程を丁寧に読み取っていくことが大事だということに自身の考えが変容していきました。

私が最後に担任した学年は1年生でした。思い出深い授業実践があります。それは、子どもたちに一枚の「路線バス」の写真を見せるところから始まりました。「バスにはバックミラーが何枚付いていると思う？」子どもたちに問いかけました。「自動車と同じように3枚くらいかな」「もっと多いと思うよ」「大きいミラーが一枚だけじゃないかな」思い思いの意見が出てきます。提示した写真のバスには、実は13枚も付いていたのです。子どもたちはその事実に驚きます。「どうしてそんなにたくさん付いているのだろう？」次の「問い」が生まれます。バックミラーは多くの場所を見るためのものです。バスの運転手さんは、たくさんの人たちの安全を守るためにいろいろなところを見ながら運転していることに気付きます。

次の時間は、運転手さんのロールプレイをやってみました。子どもたちは運転手さんになりきります。ミラーの大切さを学んだため、目をくるくる回してバックミラーをしっかりと見ながら上手に運転します。私は、運転手役の子に、「先生にお客さんをやらせてよ」と頼みました。バスに乗り込むタイミングで、運転手役の子に、「プールと一緒に行く友だちがまだ来ないので待ってあげてください」と頼みます。不意の質問に運転手役の子も戸惑います。他の子ども達も身を乗り出して様子を見ています。運転手役の子は、私をじっと見て一言、「できません」。教室に笑いがおきます。その後、「みんなが運転手さんだったらどうする？」と私は子どもたちに投げかけました。1年生がディベートを始めます。「僕が乗り遅れそうだったときに待ってくれた」と経験を語る子。「バスには他にもお客さんがいて急いでいる人もいます」と他者意識で考える子。「バスにも運行表があるよ」バスが大好きな子の意見です。多様な意見が出ます。子どもたちに「本物の運転手さんに聞いてみたい」という切実な願いが生まれました。

次の週、本物の運転手さんが教室に来てくださいました。子どもたちは大喜びです。いくつかの質問に答えていただいた後、先述の問いに運転手さんはこうお話ししてくださいました。「本当はその子のために待ってあげたいのだけど、バスの運転手さんとして考えると時間通りに運転しないといけないから待ってあげられないな、ごめんね」役割葛藤のお話です。そしてこう付け加えてくださいました。「でもね、もしバックミラーにプールバックをもっている子が見えたらその場合は待ってあげるよ」子どもたちから拍手が起きました。

その日の学習感想にはこう記した子がいました。「今日は本物の運転手さんが教室に来てくれました。私は、やはり運転手さんは自動運転じゃなくて人がやらないといけないと思います」実は、その授業の前に「自動運転システム」の話題も出ていたのですが、そのことを思い出しながら、本物の運転手さんのお話を聞き、プロとしての臨機応変な対応と優しい人柄に触れた上での感想だと解釈できます。当時はまだAIという言葉が無かった頃ですが、今思うとその子の感想は、「人がやることの意味」が込められているといえます。



この実践では、私自身がワクワクしながら学びました。子どもとともに創った実践でした。「子ども研究」には、意識調査や実態調査といったもの、数値化されエビデンスが示されるものも多く、実際に私もその種の研究を行います。認知心理学を専門としているので、統計で事象を見ていくことが中心です。一方で、こうした実践の事実からわかることが多いと思います。実践記録として綴る作業の中から子どもたちの発言やつぶやき、表情、感想を後から解釈し、行間を読んでいく作業を通じて見えてきたことがたくさんあります。学習でも生活でも、子どもたちの事実を丁寧に見取り、解釈し、行間を深読みしていくことでよりその理解が深まると考えています。「実践記録」が物語ることの大きさも感じます。これからもそういう側面の「子ども研究」を大切にし、続けていきたいと考えています。(了)

← 軽井沢の暖炉の火 (細江久美子)

II 子どものころ：Q&A

深谷和子 (東京学芸大学名誉教授)

友だちがいないといけませんか (中3男子)

Q

先日、通知表に「友だちがいないのが心配」と書かれていて、それ以来母親がうるさく言ってきます。友達って、親友の事ですか。それなら、僕にはいないけれど、クラスの子からも別に逃げてるわけじゃないし、必要があれば話します。成績もまあ上位だし、有名な高校に合格したいと進学塾に通っています。この夏も宿泊の夏期講習を受けました。高校に入ったら予備校にも行って、希望の大学に行くつもりです。友だちがいないと、どうしていけないんですか。無理して作る必要もないと思うのですが。

(けんじ)

A

あなたは成績もいいし、有名高校にも入学できて、将来は難関大学にも合格できるかもしれません。ちゃんと目標を持って頑張っているのですから、友だちづきあいは無駄な時間に思えるのかもしれない。休み時間も、本を読んだりとか。その明確な目標と意志が、私にはちょっぴりうらやましくも思えます。

このまま時が過ぎて、あなたは望みの高校にも大学にも入学できて、望みの職業にもつけるかもしれません。さて、その先を考えたことがありますか。その時になっても、あなたには、「友だちは、いらない」のだろうか。

職場はどこでも、1人で仕事をするようにはできていないので、同僚と分担したり協力して、仕事を進めていくことが必要な場所なのです。でも、その時にあなたは同僚との関係の持ち方が分からない。だって、それ迄友だちとの関係を学んでこなかったんですもの。急に同僚とうまくやっついこうとしても、やり方が分からない。で、つい一人で仕事を進めてしまう。周りからは「あいつは身勝手だ。KYだ」といわれ、周囲とぎくしゃくしてしまう。でもあなたが困っても、周りは見ても見ぬふり。誰も助けようとはしてくれない。将来、そんな状況になっているご自分を、あなたは

考えたくないでしょう。

心理学には、エリクソンという心理学者が提唱した「発達課題」という考え方があります。大学に入ったら習うと思うけど。

人には、人生のそれぞれの年齢段階に、身につけておかなければならない「課題」があって、それを一つずつクリアしていかないと、次の段階で発達がつまづいてしまう。中3のあなたは、将来の進路のために勉強することや、なりたい職業を探すこともひとつの「課題」だけど、もう一つ、友だち（同性とも、異性とも）と、いい関係を作る力を身につけることも、勉強と同じくらい大事な「発達課題」なのです。それをクリアしておかないと、職場で困るかもしれないし、まだ先のことですが、結婚だってうまくいかないかもしれない。脅かすわけじゃないけれど。

「友だちなんか、無理して作らなくてもいい」なんて言わずに、ごくふつうに、友だちとつきあう努力をしたほうがいいんじゃないかと私は考えますが、どうですか。

イベント情報

1) 日本子ども支援学会発会式

日時：2018年 3月 3日（土）午後6時15分～

場所：東京学芸大学 S203 教室

2) 設立記念ワークショップ「いじめ問題を再考する」

（同会場にて） 午後6時20分～8時

基調提言＜葬式ごっこの意味するもの＞ 小林 正幸（東京学芸大学教授）

パネラー 湯浅 俊夫（一橋大学講師、スクールカウンセラー）

パネラー 磯崎奈保子（弁護士：吉川総合法律事務所）

会員談話室

句会むさしの

○身はひとつ二合の酒に曲り葱

安田勝彦

季語は葱（ねぎ）です。栃木で手に入れた曲り葱を茹でます。茹でたてのふわふわの曲り葱にかつお節と醤油をかけるとやっぱり酒ですね。飲めない私ですが、酒は2合くらいかなと想像をしながら、熱燗でお猪口、2杯。「身はひとつ」を感じながら悦に入ります。

○天国はもう秋ですかお父さん

塚原彩（小学生）

これは、私の句ではありません。お父さんを交通事故で亡くした小学生の句です。何と悲しく、何と切なく、父を思う気持ちに、私は涙を流しながら何回も読み直しました。昨年出会った最高の句でした。皆さまも今年の一句を探してください。（安田）

○百五までまだまだあるね英司さん（父）

上島 博

※ 日野原重明さん、2017年7月18日にご逝去。享年105歳。

父の入院中にノートにメモった句です。俳人の夏井いつきさんも歌人の小島ゆかりさんも、介護の時にたくさんの句や歌を詠まれたといひます。病人が落ち着いて寝付いたら案外時間ができる、家族の連絡用のノートもある、そして何より詠みたい思ひがあります。94歳のお父ちゃん、日野原さんのようにもっと生きてね……。でも、その2ヶ月後、父も大往生を遂げました。

（母は1人になりましたが、お陰様で元気に暮らしております。昔の人はみな強いです。）

○梅の香に天神様の坂遠し

森永徳一

夫婦二人で、子どもの合格祈願に出向いたのに、白梅と紅梅の香りに誘われて、本殿までの急坂と階段に、年のせい立ち止まり、子どももよくここまで努力して来た。そして、希望の学校に合格してもらいたいという親心です。

※みなさま：無季でも自由律でも、俳句めいたもののご投稿を歓迎いたします

自己紹介（到着順）

○斎藤二三子（幼児教育研究者・幼少年教育研究所所員）

幼児教育にかかわって50数年。10数年の幼稚園教諭の後、日本児童文化専門学院、国際学院埼玉短期大学、東京成徳短期大学講師を経て、現在。

心が弾むと、ことばも弾む。「心とことばを大切にする保育とは…」

ご依頼があると日本全国どこへでも馳せ参じ、幼児教育研究者と現場保育者の橋渡しをし、現場保育者の立場から、全国各地の幼稚園や保育園の顧問指導等、各地の園で保育全般にわたるアドバイザーをつとめております。

乳幼児と関わり、子ども達のことばに共感し、教えられて、40数年…日々保育を楽しんでいます。また、保護者、保育者への育児相談、教育相談、教育研修会、実技指導、公開保育、講演活動なども。子ども達が喜び、心やことばを大切にす伝承遊びなど、楽しい遊びを発掘し、オリジナルの遊び歌の作詞・作曲や、楽しい手遊び指遊び、ハンカチ遊びなど遊びを紹介しております。

○森永徳一（埼玉県立大学）

生まれは、九州の大分県です。現在は、埼玉県立大学で非常勤講師（教育方法論担当）として勤務しています。大学卒業から、教職の道一途。東京都公立中学校に勤め約半世紀です。中学教頭（現副校長）校長を15年、ネバーギブアップで、大学で講義しています。国・都・区等の『資料作成』等は数え切れません。唯、一生懸命でした。外部の実践・調査・研究は『中学生の世界』（ベネッセ）が、私の貴重な研究体験の道場で、足腰を鍛えたものになりました。

特に最近は、「子どもの放課後が危機」に瀕していると憂いを深め、子ども問題や子ども支援の方法の課題解決に向けて、実践・研究に尽力したいと考えております。

また、余技として野鳥観察（[日本野鳥の会](#)20年）釣り、軽登山・散策等の野外活動を提唱・実行しています。また、俳句作り（俳号：翡翠）は「[炎環](#)」会員、「青淵俳壇」と調布FM等に投句しています。「四季想句」（自作俳句集）で自我自讃しています。

○谷野敏子（堺市立教育センター長）

奈良教育大学で深谷昌志先生に教えていただいた後、小学校教諭を25年務め、その後小学校教頭、幼稚園長、小学校長を務め、教育センター参事を経て、現在センター所長をしています。長い間、現場で子どもたちを前に仕事をしてきたので、今の立場はよくわからないことも多いのですが、（まず役所言葉がわかりません。去年は、「きょうらん」・・・まさか「狂乱」？いやいや「供覧」

みたいな感じでした。)先生方の研修やサポートを担う場所ですので、少しでも先生方を通して子どもたちに還元できればと考えています。

堺市の教育センターには、研修・科学教育・情報教育・教育相談・企画調整の5つのグループがあり、ICTなど教育環境の整備や養成期から管理職までのキャリアステージに合わせた研修を行っています。また、不登校生徒支援のための適応指導教室も持っています。現場では、ベテラン層の大量退職に伴い、若手の大量採用により、集団づくりができなかったり、今まで当たり前のようにしてきたことが継承されなかったり、そもそも人間関係づくりが難しかったりする等、さまざまな問題が起きていますが、学び続ける教員を育てる一助ができればと思っています。



安中(あんなか)のウインター・スイート(蠟梅)(細江久美子)

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・(ニューズレター委員会)

おかげさまで、やっと学会発足準備号が出来ました。皆さまのご愛読と、ご自由なご投稿をお待ちします。

投稿先：kazukofukaya@nfty.com

なお、本号の1ページ目の詩は、著作権協会の許諾を得てあります。

<編集委員>

深谷和子・中園孝信・湯浅俊夫・三枝恵子・大高志芳・池田文枝・吉野真弓・上島博
(以上)

<風の便り 発足準備号 目次>

今月の子ども、今月の詩 -----	中園孝信・ゆあさとしお
子ども支援実践報告「 東京にも空がある 」-----	小林未央
子ども研究ノート	
I 私の子ども研究から -----	鈴木 聡 (東京学芸大学 准教授)
II 子どものころ：Q&A -----	深谷和子
イベント情報	
会員談話室	
句会 むさしの -----	安田勝彦・上島博・森永徳一
会員自己紹介 -----	斎藤二三子・森永徳一・谷野敏子
編集後記	